

BOOK REVIEW

私たちが現在進化中

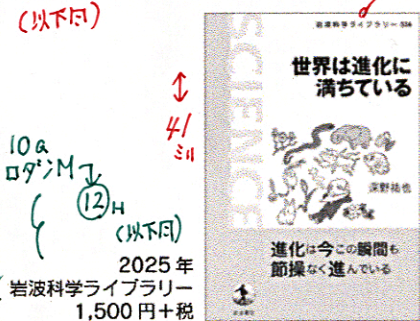
『世界は進化に満ちている』 20a 新3M (以下同)

深野 祐也 著

生物の進化とは、何万年もかけて、生存に有利な姿形に徐々に変化することである。シマウマが縞々なもの、モミジの葉に切れ込みがあるのも、MRSAがメチシリンに耐性があるのも、進化の結果である。勘違いしてはいけないのは、進化は終わってしまった過去の話ではなく、現在も進行していることである。つまり、今地球上に生きるすべての生物はどれも最終形ではなく、進化の途上にある。ヒトが生きて百年そこらの短い年月では実感できないが、確実に進化している。書評子は、この実感できないことを、ずっと残念に思ってきた。ところが、この認識は間違っていた。なんと、進化は意外と早く進み、姿形が変わるのを観察できるというのだ。本書は、進化学を専門とする研究者が、その最先端を一般向けに紹介してくれる、好書である。実に興味深い。この岩波科学ライブラリーは、知的好奇心をくすぐる面白い本が揃っている。

生存に有利な姿形に変化する進化の機序が、ごく簡単な確率論を使って、ていねいにわかりやすく解説されている。身近な生物が、数万年ではなく数年で姿形を変えた事例には驚いた。徐々に、しかし法則どおりに確実に姿形がある方向に変わっていく様子は、よくできた手品のようである。本書は、学校生物を理解していれば中高生でも読める。そんな若い世代だと、本書を読んで「将来は生物学者になるぞ」と、人生を決めるほどの衝撃を受けるかもしれない。

世の中に興味深い現象は数え切れないほどあり、生物の存在もその一つである。個体の生命活動だけでもわくわくするのに、それらが増殖して命をつなぎ、しか



も姿形を進化させているとは、ヒトが信じる神さへ超越した奇跡に思える。その仕組みを解き明かしてきた研究者にも脱帽である。宇宙にも文学にもロマンがあるが、進化にもロマンを感じるのには書評子だけだろうか。本書は客観的な科学的事実を述べているのに、不思議と、温もりのある詩的で壮大な何かを感じてしまう。

農作物や花卉や家畜やペットは、ヒトに都合の良い姿形になるよう長年かけて人為的に進化を促された生物である。メンデルやダーウィンが遺伝や進化を発見する前から、理論はともかく品種改良と称してヒトは進化を操ってきた。現代の遺伝子工学の進歩は誰もが知るとおりで、神の領域にまで踏み込んでいる。

来月号の本欄で紹介する『キツネを飼いなすー知られざる生物学者と驚くべき家畜化実験の物語』は、本書とは関係なく書店で手に取ったのだが、偶然にも、身近な動物の急速な進化の話だった。本書を読んだ直後で進化の機序が頭に残っていたおかげですらすらと読むことができ、面白さ倍増だった。併せてお勧めする。

気候危機と環境汚染は、ヒトが巻き起こした地球全体の変化で、しかも数十年というものすごい速さで進んでいる。ど

んな生物種も、多少の環境変化には追いついてきたからこそ今まで命をつないできたのだが、この数十年の変化にはさすがに追いつけない。多くの種が絶滅に追いやられている。ヒト自身もそう遠くない未来に絶滅するのかもしれない。自業自得もしくは神による排除である。しかし、この急激な変化に順応して進化する種も間違いなくいて、ヒトがいない地球で伸び伸びと暮らすことだろう。この地球環境の急変と進化についても、本書では一つの章を設けて、ていねいに述べている。必読である。

SF好きの著者は最終章で、ヒトが月や火星に住む頃のヒト自身の進化について予測している。ここだけは科学的根拠はなく想像だけで述べているのだが、面白い。書評子も、都会人の進化について妄想を広げてみたい。走って嗅ぎ分ける能力は獲物を捕らえて敵から逃げるために必要だったが、都会では不要で、脚も嗅覚も退化するだろう。暗闇や遠くを見ることがなくなり、明るい液晶画面だけ見ればよい視力になる。堅い物は食べないので、咬筋も歯も小さくなる。空調の効いた屋内にいたので、体温調節能は衰えて体毛もなくなる。少々鈍臭くても生きていけるので、不器用になり敏捷性も失われる。自分で考えずに言われたことだけすればいいので、頭脳は退化する。ここまで書いて、こんな形質を備えた未来人がもうすでに身近にうじゃうじゃいる気がしてきた。確かに、世界は進化に満ちている。

水谷 光 (以下同) 12a 新3M 12a 新3M 12a 新3M

戦後80年 ⑥ 65点の歴史観

『「あの戦争」は何だったのか』

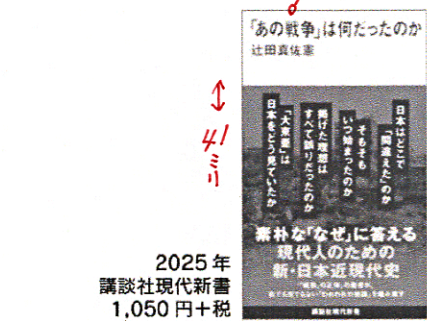
辻田 真佐憲 著

戦後80年に当たるこの年に5回、とりわけ太平洋戦争を題材にした作品を取り上げてきた。実はこれまで深く考えることなく、真珠湾攻撃以降に欧米やアジア諸国と戦った戦争を「太平洋戦争」と呼び、ずっとそれを用いてきた。ところがつい最近、ある新聞記事が目に残った。そこでは「アジア太平洋戦争」という表記が使われていたのだ。

絶好のタイミングというのか、この名称を巡る妥当性を含めて、この戦争について新たな立場で批判的に考察する新書に出会った。タイトルは「あの戦争」は何だったのか、著者は辻田真佐憲氏。本書の「おわりに」で述べているが、著者の歴史への最初の接点は教科書でなく、「歴史シミュレーションゲーム」「歴史マンガ」「仮想戦記」だったそうだ。著者のユニークさは、歴史研究においてこうしたエンターテインメント性を切り捨てることなく、むしろそれに接したときの興奮が歴史への限らない興味を掻き立て、新しい視点を提供してくれる点である。唯一の正しい解答の探求という学術研究の王道にこだわるあまり、単なる事実の羅列に終始すれば歴史研究は味気ない。「強い言い方」と断っているが、「客観性の暴走は歴史を扼殺してしまうだろう」とまで書いている。

著者は「歴史は解釈であり、現在の興味関心や価値観によってつねにかたちを変える」と明言している。歴史記述はスタンス次第。それによって、こうもああも考えられる。歴史の見方の多面性が色濃く主張され、それを学ぶことが本書の肝要である。

第一章では、太平洋戦争という名称問題を考察している。やはり一般的には「太平洋戦争」という名称が妥当である。だ



が、戦争当時は「支那事変」を含めて「大東亜戦争」と呼称していた。否、もっとさかのぼって満州事変こそ日中間の武力衝突の発端としてとらえ、「十五年戦争」とする歴史観もある。さらには欧米列強の植民地主義の被害者という観点に立つと、ペリー来航に起点を置く歴史観もある。近年急速に定着してきたのが、「アジア・太平洋戦争」という名称。しかし、中点があると、アジアの戦争と太平洋の戦争が別個の戦争という印象を与えてしまうという懸念から、「アジア太平洋戦争」が使われるようになる。では、著者自身の考え方は？ 呼称としては、日中戦争（＝支那事変）を含めて「大東亜戦争」を採用。しかし、自分はこうだと表明しても、その正当性を頑なに主張するわけではない。いずれの解釈も論理と考証にもとづいており、名称の違いは決して恣意的、独断的というわけではない。

時間軸ばかりでなく、空間軸に沿って「あの戦争」についてとらえ出したのが第四章だ。著者自身が、かつて東条英機が歴訪したアジア諸国を旅し、「大東亜」に触れた各地の碑文を読み、インタビュー、取材を重ねる。外から「大東亜」の現在を観察し、国ごとに評価や位置づけが違う事実を知る。「大東亜」の相対化

を図る作業である。第二章は、さながら『英雄たちの選択』(NHK BSプレミアム)だ。同番組は歴史上の名のある人物が、いざ人生の選択を迫られたときにどの道を選ぶか、専門家に選択肢の中から選んでもらう人気教養番組である。開戦か、協調路線か。当時の何人もの指導的立場にある軍人や政治家の主張を紹介、解説しながら、さて「あなたならどうする？」と問いかけているようだ。まるでゲームのようだ。著者が説いている歴史観を自家菜園中の物にしていると言える。ちなみに、著者は米国の圧力に負けて協調路線を取ったとしても、日本はその後いくつもの厄介な問題を抱えることになり、平穏な道を歩むことの至難さを聡明にも明らかにしている。

歴史記述の方法についての問題意識に加えて、歴史を研究する意義についての著者の言明を忘れてはならない。「歴史を振り返る意義は、過去を美化することでも、糾弾することでもない。重要なのは、なぜ当時の日本がそのような選択をしたのかを深く理解し、わがこととして捉え直し、現在につなげることにある」。過去を過去のままに封印するのではなく、過去から今に何を学ぶか。八紘一宇にもとづく大東亜共栄圏構想はきわめて評判が悪いが、本を正せば(パリ講和会議での日本の提案である)、「人種差別撤廃」という理念が盛り込まれている。第三章は、「あの戦争」において否定すべきところは否定しながらも、一方で現在に生きる教訓や意義を導き出す。

タイトルは「あの戦争」は何だったのかだが、内容的にはその意味や位置づけを著者なりに明らかにする営みである。だが、それも不断の解釈によって書き変えられていく。100点とかゼロ点とかにこだわるのは、何とも不毛ではないか。常に未来に開かれていることを考慮すれば、現在に提示する歴史観はほぼほぼ「六十五点」と自己採点できればいいのではないかと。何とも謙虚である。少なくとも本書については、九十点はあげてもいいのではないかと。 関本 英太郎

BOOK REVIEW

流用

種が生き延びるのに必要なのは強さでも賢さでもない。
唯一、変化に対応できる能力である。(Charles Darwin)

80%
+
20%

『人類を変えた7つの発明史 火からAIまで技術革新と歩んだホモ・サピエンスの20万年』

Rootport 著

著者は匿名である。あるいはペンネームというべきかもしれないが、どこの誰が書いたともわからない書物は、しばしば胡散臭いものである。しかし読んでみるとごくまっとうな論考をしていることはすぐわかる。つまり本書は“読むに値する書物”である。著者紹介によれば、1985年生まれで会計史研究家、プログラマー、漫画原作者とある。書評子はまったく知らなかったのだが、画像生成AIを使って「サイバーパンク桃太郎」という漫画を製作し、2023年に米国TIME誌において、「世界のAI分野で最も影響力のある100人」の一人に選出されているとのことだ。謎めいてはいるが大変な実力者のようだ。

著者が論考するのは「人類社会を変えた発明」である。つまりホモ・サピエンスの生活とその後の歴史を変えた発明である。著者はこれを、1) 人類の生理学に影響を与えて、生物学的に進化させた発明、2) 情報を民主化した発明、3) 人類にはできなかったことをできるようにした発明、4) 人類にできることをより効率よくできるようにした発明、の四つのジャンルに分けて論考すると、最初に自分の考え方を明らかにしている。こうしたジャンル分けは人それぞれで、さまざまなあり得るだろうが、自分の文章は何を考察したものかという基本を明示しておくのは、好ましい姿勢である。また、読者として高校生程度を想定した難易度で記述したことも明示している。そして、その考察の最終的な目的は、「AIは人類社会をどのように変えるのか」ということである。それは、単なるAIというハードウェア/ソフトウェアの発明だけではなく、広範囲な社会への普及、つまり経済的に釣り合い、誰でもその恩恵を受け得る易操作性といった要素も考



2024年
KADOKAWA
2,000円+税

慮の対象となる。

著者が上記の基準にしたがって選び抜いた7つの発明とは、①火（正確には火の管理・利用技術）、②文字、③活版印刷、④科学、⑤鉄道（産業革命の象徴でありかつ物流を変えた）、⑥コンピュータ、⑦インターネット、である。いかだらうか。本書評の読者の少なからぬ人たちにとっては、どれもこれも「あって当然」のものかもしれないが、書評子にとっては個人用のコンピュータ（パソコン）の登場とインターネットの発展の推移は、目の前で起きていた“劇的な”変化であり、その登場前後での営為の変化は語りつくせない。

例えば文献検索である。1980年代前半までの日本国だと、コンピュータを使った検索は（書評子の勤務していた）東大でも自治医大でも不可能で、論文末尾の引用文献リストを参考にして一つ一つ書庫で探してゆくか、研究施設を備えた製薬メーカーに依頼して、そこで探してもらうしかなかった。当然ながら、出力媒体は紙である。だから1985年にMGHへ行ったとき、院内図書室でキーボードを操作して簡単に検索かつ入手できるのを知って、彼我の落差に愕然としたのである。

著者は、生物学専攻だったと言っているが、コンピュータとその周辺技術には

当然ながら明るい。しかしそれだけでなく、「情報は一気に安価になった」、「グーテンベルク（の偉大さ）は印刷を事業として成り立たせたこと」、「現代は、歴史上もっともカロリーが安くなった時代」、「脳は極めて燃費の悪い臓器」などの文章から推測して、経済学的な視野を備えていることがわかる。

本書では以上の7つの発明がもたらした人類史の変化を考察した後、終章「AIは敵か？」に至り、その前編では「現在までの歴史と課題」、そして後編では「超知能の登場する未来」として締めくくっている。

英国の社会学者コリン・ウィルソンが快楽殺人について、「自分の楽しみのために人を殺すのは、かつては王侯貴族だけの特権だったが、産業革命以後は一般庶民でも手が届く娯楽になった」という主旨のことを述べている。人類史の成果としての民主化、大衆化に伴う一つの現象ということだ。しかし、できるからといって誰もがやるわけではない。そこには法律なり道徳観なりの抑制がかかるからである。

翻って現在を見ると、情報発信が安価にできるようになったことで、莫大な量の虚偽情報が出回っている。誰もが自由に発言できるようになったのはよいことだが、そこには自ずと抑制する力が存在しないとはいけな。ルールの設定や道徳心の向上は常に現象の後追いである以上、いつの時代でも新しいものと古いものの間で多少の軋轢があるのは仕方ないが、人類の多くの部分はAIと共存するという新しい環境に（これまでの歴史と同じように）うまく適応するだろうと、書評子は考える。

アキ

福家 伸夫

（帝京大学ちば総合医療センター）